今週の為替相場見通し（2021年8月10日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		108.73 ～ 110.36	110.24	109.00 ～ 112.00
ユーロ	（ドル）		1.1755 ～ 1.1899	1.1763	1.1630 ～ 1.1830
（1ユーロ=）	（円）		129.14 ～ 130.40	129.61	128.30 ～ 130.30
英ポンド	（ドル）		1.3862 ～ 1.3957	1.3874	1.3800 ～ 1.4000
（1英ポンド=）	（円）	＊	151.17 ～ 153.25	152.95	152.00 ～ 154.50
豪ドル	（ドル）		0.7330 ～ 0.7426	0.7355	0.7250 ～ 0.7430
（1豪ドル=）	（円）	＊	80.16 ～ 81.40	81.08	79.80 ～ 81.50

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、＊印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　逸見 久貴

（1）今週の予想レンジ：　109.00　～　112.00　円

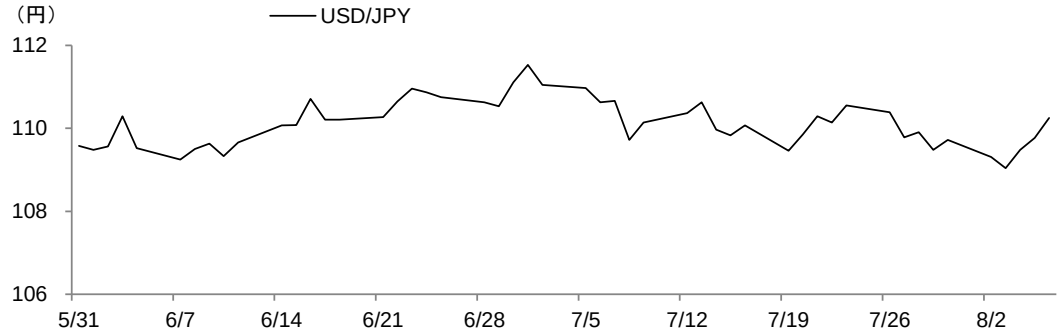
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円は、下に往って来いの展開。週初109円台後半でオープン。序盤から米金利がじりじりと下落するとドル/円も上値重い推移。海外時間に入り、米7月ISM製造業景況指数が予想を下回ったことや、米長期金利が1.5％台まで下落したことで、ドル売りに拍車がかかり、ドル/円は109円台前半まで下落。翌3日、米金利の低下を眺めながらドル売りが継続。先月につけた安値109.07円を下抜けると売りが加速、109円台を割り込んだ。一巡後は米株の堅調な推移や製造業受注、耐久財受注が市場予想を上回ったことで、ドル/円は109円付近まで反発。週央4日、米7月ADP雇用統計が市場予想値の半分以下となったことから、米経済に対する悲観的な見方が広がると、週安値108.73円をつけた。その後、クラリダFRB副議長から「利上げに必要な条件は2022年の終わりまでに揃うだろう」、「年末にかけての資産購入の減速の発表を支持」というタカ派寄りの意見が示されたことで、ドル/円は109.70円付近まで急伸。5日は週末の米7月雇用統計を控え様子見ムードの中、米新規失業保険申請件数の減少や株式市場の堅調な推移を横目に109円台半ば付近で小確りと推移。週末6日、米7月雇用統計は非農業部門雇用者数、失業率、平均時給が事前予想を上回り、米金利や米株とともにドル買いの流れとなると、110円台を回復。週高値110.36円をつけ、110円台前半で越週した。

今週のドル/円は底堅い推移を予想。コロナ感染についてはデルタ株の蔓延やラムダ株の拡大懸念など、その動向には引き続き警戒が必要だが、欧米諸国ではワクチン接種の進捗により、以前ほどの警戒感はない。一方で日本はワクチン接種率で圧倒的に劣後し、経済活動の制限が漫然と続く中、足元では連日のように過去最多の感染者数を更新。コロナ対応で他国対比遅れを取り続ける日本の状況は変わらず、日本株や円が買われ難い状況も続くと考える。金融政策面では、8月FOMCの声明文でテーパリングへの地均しとも捉えられる表現や、クラリダFRB副議長からも早期テーパリングに着手する可能性があるとの見方が示されている。また、先週末の良好な雇用統計も相俟って、市場のテーパリングへの期待感が高まり易い中、11日には米7月CPIの発表を控える。事前予想は前年同月比5．4％となっており、3か月連続で5％台の高い物価上昇率となる見込み。FRBはインフレ圧力は一時的との見方を示しながらも、長期化する場合は対応策を講じる姿勢を見せている。事前予想以上の結果となればテーパリングへの期待感が高まり、米金利上昇とともにドル/円は底堅く推移すると考える。

（3）先週までの相場の推移

先週（8/2～8/6）の値動き：　安値 108.73 円　高値 110.36 円　終値 110.24 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部　為替営業第二チーム　鈴木　智大

(1)今週の予想レンジ:　1.1630　～　1.1830　　128.30　～　130.30　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

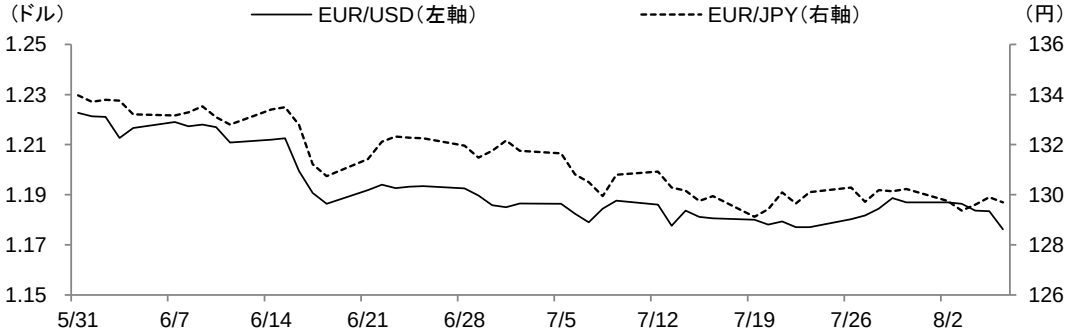
先週のユーロは、米7月雇用統計までは様子見ムードからか動意の薄い展開が続き、米7月雇用統計発表後に大きく値を下げる展開。週初2日は1.1865でオープン。欧州株の堅調推移やユーロ7月製造業PMIが予想比良好な結果となったものの、1.19台を回復することなく、値幅の狭い値動きとなった。3日も新規材料に乏しい中、1.18台後半の狭いレンジ内で方向感のない値動きに終始。4日もしばらくは1.18台後半で小康状態が続いたが、米7月ADP雇用統計の結果が予想比悪化したことによるドル売りに、週間高値となる1.1899まで上昇。しかしその後のクラリダFRB副議長のタカ派発言や米7月ISM非製造業景況指数の好結果がドル買いにつながり、ユーロは1.18台前半まで反落した。5日は前日の流れを引き継いで上値の重い展開が継続。翌日に米7月雇用統計を控えていることもあり、1.18台半ばで動意の薄い値動きとなった。6日は米7月雇用統計を前に積極的な取引は手控えられたものの、米長期金利が上昇する動きにじり安の展開。米7月雇用統計では、非農業部門就業者数、失業率、平均時給がいずれも予想比良好な結果となると全面ドル買い。ユーロは一時週間安値となる1.1755まで下落。その後も安値圏での推移が続き、1.1763で越週した。週明け9日は週末の流れを引き継ぎ軟調推移。米金利の上昇等を背景にドル買いが継続し、1.1735まで下値を更新。結局1.1736でクローズした。

今週のユーロは上値の重い展開を予想する。先週はクラリダFRB副議長のタカ派発言や、米7月雇用統計の良好な結果によるドル買い主導でユーロは軟調推移となった。米国では着々とテーパリング開始に向けて進んでいる印象があるが、ECBのスタンスは当初から大きく変わっていない。デルタ株が蔓延し、経済の再度の停滞が懸念されていることは各国共通である中、金融緩和の出口戦略に関する当局のスタンスの違いが、今まで以上に各通貨の強弱に影響を与える状況下にあり、ECBの考えが現状維持である限り、当面の間ユーロは軟調推移が続くのではないだろうか。来週の主な経済指標として、10日(火)に独8月ZEW調査、ユーロ圏8月ZEW景気期待指数、11日(水)に米7月CPI、13日(金)にユーロ圏6月貿易収支の発表が予定されている。米国のテーパリング期待が再燃している中、米CPIでインフレ率の更なる上昇が示された場合、もう一段のドル買い、ユーロの下落につながる可能性には留意したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/2～8/6)の値動き:

(対ドル)	安値 1.1755	高値 1.1899	終値 1.1763
(対円)	安値 129.14	高値 130.40	終値 129.61



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ:　1.3800　～　1.4000　　152.00　～　154.50　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

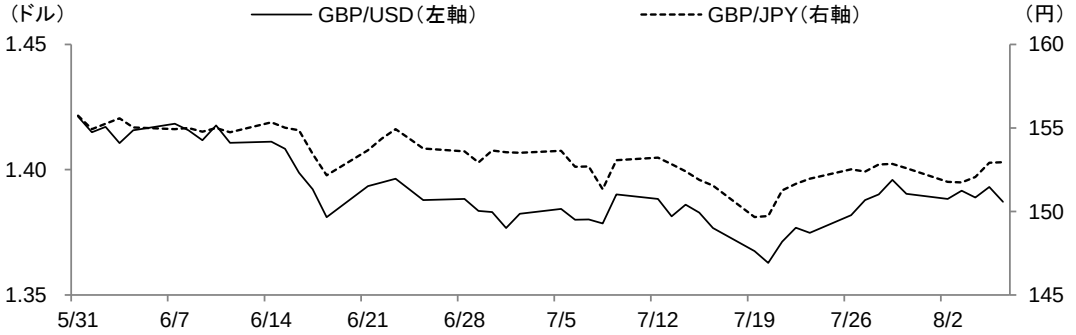
先週の英ポンド相場は、対ドルで、横ばいから最終的に下押し。ただし、対ドルでのポンド下押しはドル全面高の結果と言え、対円では下押し先行から、週を振り返れば上昇、対ユーロでは、ほぼ一貫した堅調推移を続けた。週央から週末にかけてのドル全面高は、米連銀による金融引き締め(利上げ)前倒し観測を主な要因とした。4日、デルタ株の拡大や中国投資規制などに対する懸念を背景に、原油価格などが急落、並行して米長期金利も低下。一旦はドル全面安に傾いた通貨市場で、米連銀クラリダ副議長が2023年に利上げを開始する可能性を示唆、ドルは逆に全面高に転じた。その後、発表された週次の米新規失業保険申請件数(5日)、米7月非農業部門雇用者数変化(6日)などの米労働統計が明確に上振れたことも、米連銀による早期金融引き締め観測を補強し、週引けにかけてドルは全面続騰した。金融引き締め観測という意味では、5日に発表された英中銀8月金融政策委員会の議事録は、基準金利(0.10%)、資産購入目標(総額9,950億ポンド)を据え置く一方、同委員会が金融引き締めに転じる時期に関する議論を本格化させた様子をうかがわせ、従来以上に鷹派的との印象を与えた。ポンドの(対ドルでの)下落幅が限定的にとどまり、対ユーロ、対円で明確に水準を切り上げた背景には、英中銀のこうした鷹派的傾倒も寄与したものと考えられた。

今週の英ポンド相場は、堅調気味の横ばいを予想。仮に、対ユーロで直近高値(4月5日の0.8472)を明確に上抜ければ、ポンド買いに弾みがつく可能性も考えられよう。上述の通り、この間、主要通貨市場の値動きは、金融政策動向が大きな鍵を握っていたが、実のところ、米連銀以上に、英中銀は金融引き締めに前向きと見られる。新型コロナ罹患者数は、引き続き高水準ながらも、ワクチン接種の進捗を背景に、英経済活動は概ねコロナ禍以前の状況を取り戻しつつあるように見える。50歳を越える人たちに3度目のワクチン接種を実施する計画が進んでいることも、景気回復に向けた自信を深めることになるだろう。EU離脱に伴う(特に北アイルランドとの通商に関する)混乱や、自主隔離などを要因とした人手不足などの問題が解消したわけでは決してないものの、世の中が正常化に向かっているという感触は確かにある。並行して英物価上昇圧力は①賃金 ②燃料価格 ③住宅価格など多方面から顕在化しつつある。①は人手不足を背景とするが、確かに、ロンドン市内を歩いていると、飲食店や商店などでやたらと求人広告が目に付く。②は燃料市場規制当局が、6日、価格上限を大幅に引き上げたことで今秋以降の価格上昇が確定的になっている。③は英中銀ブロードベント副総裁が、6日、住宅価格高騰は、在宅勤務の定着による都市部郊外の住宅需要の高まりなど構造的な要因を背景とするなどと懸念を表明していた。英王立公認不動産鑑定士(RICS)の住宅価格指数は、確かに、足元記録的な高水準を維持しており、11日(水)に予定される7月指数の発表は興味深いだろう。他にも、12日(木)に、英4～6月期GDP暫定値、英6月鉱工業/製造業生産などの発表が予定されており、強めの数字に対する反応(早期利上げ期待の高まり→ポンド押し上げ)が警戒されるだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(8/2～8/6)の値動き:

(対ドル)	安値 1.3862	高値 1.3957	終値 1.3874
(対円)	安値 151.17	高値 153.25	終値 152.95



(資料)ブルームバーグ

4．豪ドル

アジア・オセアニア資金部　シドニー室　川口　志保

（1）今週の予想レンジ：　0.7250　～ 0.7430　　79.80　～　81.50　円

（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

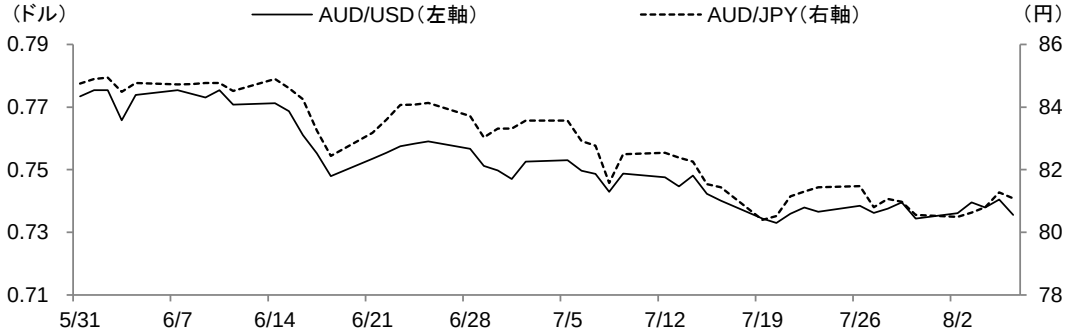
2日は日中に発表された中国7月製造業PMIが予想を下回り、0.7330近辺まで下落した。しかし、原油安に伴い米10年債金利が下げ、また発表された米7月ISM製造業景況指数が予想を下回り、ドル売りが強まったことで豪ドルは0.73台後半へと上伸した。3日はRBA理事会が9月からのQE縮小を予定通り行う事を発表し、このサプライズを受けて0.74台へ上昇。NYオープンではデルタ株の感染再拡大報道等がリスク回避の雰囲気に繋がり、米株が下げて始まると豪ドルも追随し、0.7360近辺まで下落。但し、米企業決算発表でポジティブな内容も出てくるとNY引けにかけては豪ドルも0.74手前まで戻した。4日は朝方NZの失業率が4.0％まで改善したことが発表され、豪ドルも連れ高となり、再び0.74台のせ。中国7月PMIが予想を上回った事や米7月ADP雇用統計が予想外に弱かった事も豪ドルを支えた。しかし、その後米7月ISM非製造業が予想を上回り、ドル買いを背景に豪ドルは0.7370近辺まで下落した。また、米国取引時間でクラリダFRB副議長が「米経済がFRBの予測通りに推移すれば年内にテーパリングを発表し、2023年には利上げを開始」と述べた事もドル買いを誘った。5日は0.73台後半からじわじわと0.74台前半へ上伸。堅調な結果となった豪7月貿易収支に関しては特段の反応はなかったものの、原油高を背景に豪ドルは上昇した。また米7月雇用統計を控えて新規失業保険申請件数が2週連続で減少し、労働市場の改善に期待が高まった。これを受けて米株に買いが入ったことでも豪ドルが支えられた。6日は早朝0.74台でスタート。ロウRBA総裁が議会証言で7～9月期のGDPの下げはロックダウンの期間によるとし、コロナリスクで2四半期連続のマイナス成長を否定できないと述べた。また、8月の理事会でテーパリングの延期を検討したと述べたことでも豪ドルは徐々に重くなり、テーパリングを見送った理由を「重要なのは経済見通しだ。来年には力強い回復を予想している」としたものの、豪ドルは0.7380近辺まで下落した。米7月雇用統計では雇用者数変化は予想値、前回値を共に上回り、失業率も5.4％まで改善した。これを背景に米10年債利回りは僅かに1.3％台を回復し、ドル買いとなった事から豪ドルは0.73台半ばまで下落した。

今週は先週金曜の米7月雇用統計の結果が堅調であったことから全般的にややリスク選好ムードが戻ってくると見るが、豪州が先週末に1日の新規感染件数が300件を突破したことから不安材料が大きい為、豪ドルは引き続きコロナリスクで揉み合いとなるとみる。豪州ではデルタ株の感染状況とワクチン接種率の推移を見守るしかない中、一方で米国では先週末の雇用統計を受けてこの先のFRBの政策姿勢が注目される。今月下旬に開催されるジャクソンホールに向けてテーパリングの開始時期やペースなどに関しての議論やコメントが出てくると思われる。キャピタルフローの行方には注意を払いたい。今週は10日に豪NAB企業景況感、11日ウエストパック消費者信頼感、米国7月CPIが発表される、13日夜にミシガン大消費者マインドが発表予定。先週末の米雇用統計後の流れを確認するとともに先週末に24時間の新規コロナ感染件数が300件を超えたNSW州の進展を見守りたい。

（3）先週までの相場の推移

先週（8/2～8/6）の値動き：　（対ドル）安値　0.7330　高値　0.7426　終値　0.7355

（対円）安値　80.16　高値　81.40　終値　81.08



（資料）ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。